

第5章 総括

縄文時代

中島遺跡は第1～3・5地区の調査において、主に包含層から多数の遺物が出土した。

調査結果として第1・2地区にて遺構の検出がされており、縄文時代に該当する遺構として竪穴建物2基、土坑10基、焼土4ヶ所を記録している。そのうち遺物との対応関係が見られる遺構として、第1地区2次調査にて検出されたSB01、SK01、SK08の3ヶ所が認められる。

遺物に関して土器・土製品に関しては156点、石器・石製品に関しては93点を本報告にて図化している。これらは一部を除きほとんどが一括で採り上げた資料であり、遺構との相関関係や時期について明確に述べることは困難であるが、遺跡内に住居址が確認されていることからいずれも一定期間の居住に関わる資料であると考えられる。

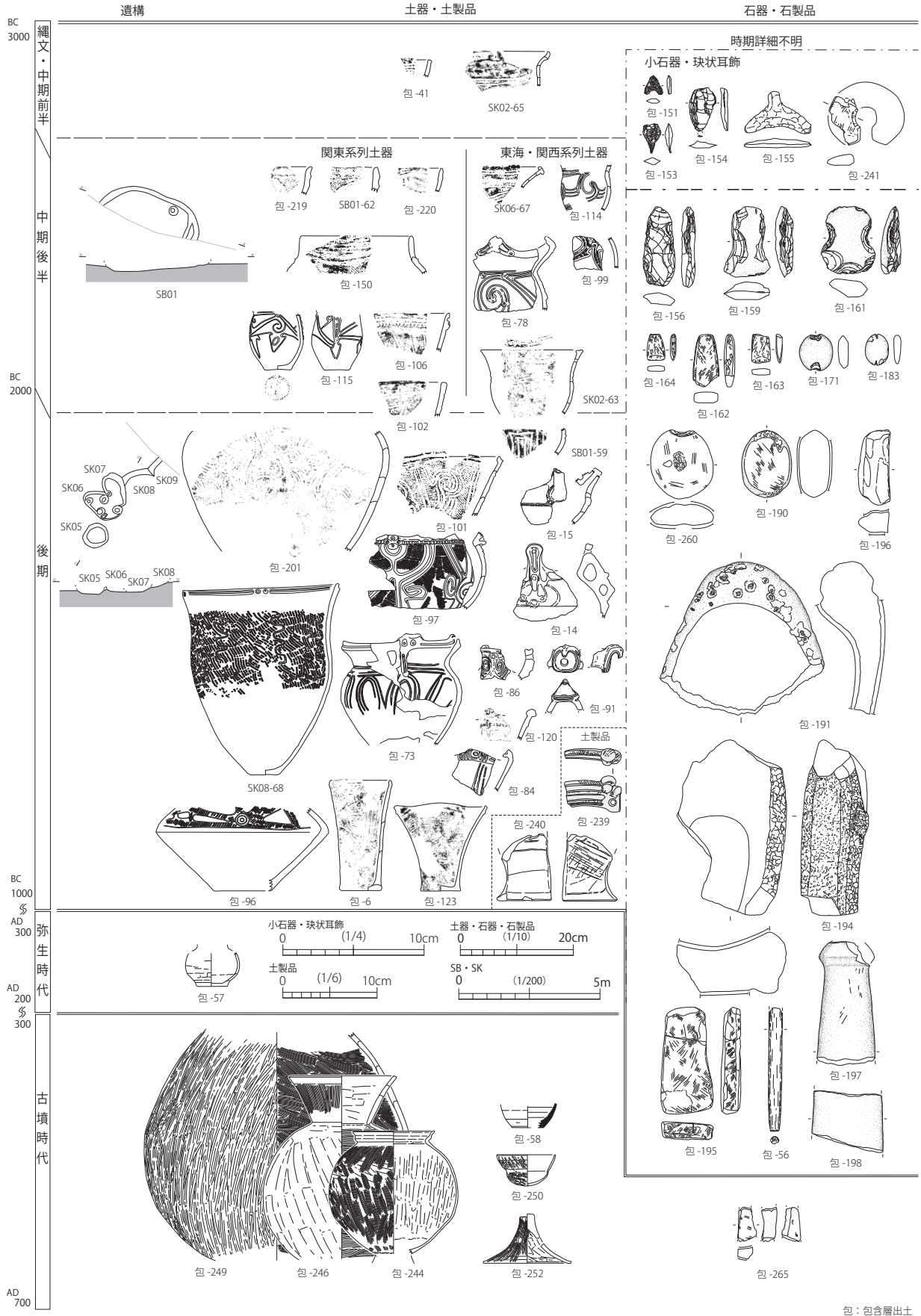
出土土器の内訳は、最も古いものとして五領ヶ台式の土器が出土しており、縄文時代中期初頭に設定している。数量的には称名寺式から堀之内式の型式が多く、中島遺跡における主な活動時期は縄文時代中期末～後期前半頃になるかと思われる。これは近隣遺跡である宇東川遺跡の縄文時代資料とも類似する。出土遺物の中には他地域からの土器の流入が見られ、東海西部や関西方面から来たと思しき福田K2式、縁帯文土器、松ノ木式土器が確認されており、縄文時代中期末～後期に至る時期の東西交流を示唆するものとみられる。福田K2式に関しては愛知県が東限とされているが、伊豆大島や東京湾沿岸部の遺跡で存在が確認されており、太平洋沿岸部における海路を使った関西方面からの伝播の可能性が示唆されている(橋口2001)。当時の地理環境的に浮島ヶ原低地帯と海岸部は接続しており、水路による遺跡への接近も可能であったとみられることから、上記のような海から遺跡へという形で土器の流入は想定できるものとする。土製品は堀之内式土器の破損した口縁部を再利用した装飾品や土偶の脚部が確認されており、特に後者は祭祀的な性格を帯びたものとみられる。

石器の内訳は、ほとんどが包含層一括出土であるため、遺構との関連性と時期の詳細については不明な部分も多いが、縄文時代の所産であるとみられる。数的に石鏃などの小型の定型的石器は少数で、主に打製石斧や磨石類・石皿などの石器が主体である。これらの様相からいわゆる狩猟具のような石器が少なく、植物加工などの生業を想定できる石器が多いといえる。またサイズがある程度大きい石器や使用痕系石器のほとんどは在地の石材であり、水場で採取できる円礫が多いように見える。遺跡の近くには河川や湖沼があったとみられることから、素材はこれらの環境から採取されたものであると思われる。打製石斧の石材などは富士川流域にみられるものが多く、また礫面が残されているものが多い点から、石材は遺跡内に持ち込まれ加工されていた可能性がある。また土器と同様に磨製石斧や石棒の中には在地の石材でないものが使われており、これらは他地域との交流品であった可能性を指摘できる。

弥生時代以降

第1～3・5地区の包含層からは弥生時代以降の遺物も少数ながら出土している。遺構に関しては弥生時代以降のものを特定するのが困難であるため言及は控える。

内訳としては弥生土器が1点、土師器が9点、須恵器が3点、石器が1点となる。遺物点数が少なく詳細なことは不明であるが、244のようなS字口縁をもつ甕や246のような直口壺が見られ、古墳時代における大廓式後半の土器であると考えられる。これらのことから、弥生時代以降は縄文時代に比べ遺跡の利用頻度が低下しているとみられ、古墳時代の大廓式後半あたりの時期に小規模ながらの活動があったものと考えられる。



第 66 図 中島遺跡における遺構・遺物の変遷